平成　21　年　4　月　16　日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2006～2008
課題番号：18791686
研究課題名（和文）子どものアトピー性皮膚炎が家族に与える影響とそれに対する家族の対処行動

研究課題名（英文）The influence of children's atopic dermatitis on their families and family's coping behavior

研究代表者
三戸　由恵（MITO YOSHIE）
首都大学東京・人間健康科学研究科・助教
研究者番号：60404943

研究成果の概要：子どもがアトピー性皮膚炎に罹患することによって，家族がどのような影響を受けるのか，また，その影響に対して両親がどのように対処しているのかを把握することを目的とし，アトピー性皮膚炎の子どもをもつ両親を対象に，インタビュー調査を実施した．その結果，子どものアトピー性皮膚炎は，両親，特に母親の睡眠に影響を与えている他，ライフスタイルにも影響していた．また，両親は，環境整備や情報収集，治療方法の模索といった対処行動をとっていることが分かった．

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	500,000	0	500,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	150,000	1,850,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：アトピー性皮膚炎，アレルギー，子ども，家族，対処行動，看護

１．研究開始当初の背景

研究開始当初，疫学調査によると，アトピー性皮膚炎の有症率は増加の傾向にあり，乳幼児をもつ母親を対象とした調査では，アトピー性皮膚炎に関する不安も増加の傾向にあった．

これまで，子どもがアトピー性皮膚炎に罹患すると，家族に多岐にわたる影響があることは多くの研究で述べられてきた．しかし，アトピー性皮膚炎は憎悪・寛解を繰り返す疾患であり，慢性的な経過の中で変化するであろう家族への影響内容やその出現時期をとらえた研究は皆無であった．

アトピー性皮膚炎の子どもとその家族への介入に関しては，小児科医，心理士，栄養士の専門職チームがグループセッションをおこなう教育プログラムや，皮膚科専門看護師による家庭訪問をおこなう介入，専門医による介入により，母親の皮膚症状へのケア能力があがり，子どもの皮膚症状の改善につながったという報告がある．しかし，これらは子どもの皮膚症状を改善するためだけの介入である．

家族への影響を考えると，その影響を緩和するために，家族を対象としたなんらかの介入が必要であろう．そのような介入は，看護職が担える役割だと思われるものの，アトピー性皮膚炎の子どもをもつ母親を対象とした調査では，外来において看護師との接触そのものがないという母親が８割以上であり，本邦ではアトピー性皮膚炎の子どもをもつ家族に対して看護職から十分な介入がなされていないのが現状であった．

また，アトピー性皮膚炎の子どもの看護は，家族が家庭でケアを継続できるようにするために，家族の対処能力を高めることが重要である．そのためには，家族の対処能力を把握し，その能力に応じた介入が必要であろう．しかし，前述したように，本邦ではアトピー性皮膚炎の子どもをもつ家族に対して十分な介入がおこなわれておらず，どのように対処能力を把握するかも明確ではなかった．

本研究により，家族がおこなっている対処行動が明確になれば，同じ疾患で悩んでいる家族や乳幼児をもつ母親たちにとって，自らの行動を振り返る上での指針や今後の参考にもなり得る．看護職のみならず，アトピー性皮膚炎に罹患している，もしくは罹患する可能性のある家族に対しても，この研究結果の意義は大きいと思われる．

２．研究の目的

本研究では，子どもがアトピー性皮膚炎に罹患することによって，家族がどのような影響を受けるのか，そのプロセスと構造を明らかにし，その影響に対して家族，特に両親がどのように対処しているのかを把握することを目的とする．

３．研究の方法

研究方法に関して，(1)研究対象者，(2)対象設定の方法，(3)データ収集方法，(4)分析方法の順で，以下に記す．

(1)研究対象者

アレルギー専門医からアトピー性皮膚炎であると診断された乳児期から学童期の子どもをもつ両親で，研究への理解と参加同意を得られた方を研究対象者とする．

(2)対象設定の方法

小児アレルギー外来，皮膚科外来をもつ病院，クリニックの病院長に，研究協力の依頼をおこなう．研究者は，研究への理解と協力への同意を得られた病院で，対象になりそうな方を紹介していただいた後，その方に直接，研究依頼書を用いて研究についての説明と依頼をおこなう．その後，同意を得られた方に，研究協力の承諾をとり，研究対象とする．なお，研究協力を依頼する病院の倫理委員会からの承認を得た後，研究を開始する．

(3)データ収集方法

半構成的面接により，子どもがアトピー性皮膚炎に罹患してから現在までの症状の変化と家族への影響について具体的に話してもらい，その時の対処方法について掘り下げて聞く．

(4)分析方法

データは許可を取って，テープに録音し，その後文章にする．分析には，グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いる．分析過程では，質的研究の専門家のスーパーバイズをうける．

４．研究成果

以下，研究成果に関して，(1)対象者とインタビューの概要，(2)分析結果，(3)今後の展望の順に記す．

(1)対象者とインタビューの概要

アトピー性皮膚炎の子どもをもつ母親２名，父親２名にインタビューを実施した．1組は，父親，母親２人を同時にインタビューし，もう 1 組は，それぞれ別々に実施した．また，理論的サンプリングとして，アトピー性皮膚炎の子ども１名，食物アレルギーの子どもをもつ両親 1 組にもインタビューを実施した．インタビュー時間は，45 分～125 分であった．

(2)分析結果

以下，①子どもがアトピー性皮膚炎であることによる家族への影響，②家族がおこなった対処行動について述べる．

①子どもがアトピー性皮膚炎であることによる家族への影響

子どもがアトピー性皮膚炎になると，夜間子どもが痒みにより眠れなくなり，両親，特に母親の睡眠に影響を与えていた．痒みによる夜間の睡眠障害は，子どもの年齢にかかわらず生じていた．乳児であると，夜間授乳後もなかなか眠らず，母親は常に子どもを抱いている必要があり，睡眠不足を生じていた．学童期の子どもの場合は，自ら痒みを訴えるため，母親は子どもの身体を掻くなどの対応をすることで睡眠不足になっていた．

また，経済的な影響も生じていた．子どもの皮膚の症状を改善するために，情報収集をおこなったり，民間療法をおこなったりすることによる経済的負担も生じていた．

その他，両親は兄弟への影響も懸念していた．アトピー性皮膚炎の子どもが入院するなどの状況が生じると，母親がその子どものケアのために家を不在にしなければならず，兄弟が寂しい思いをしたのではないかと両親は兄弟への影響を感じていた．

母親が仕事をしている場合，子どものケアのために職場復帰への時期を考慮するなど母親のライフスタイルにも影響していた．

②家族がおこなった対処行動

子どもがアトピー性皮膚炎であることによる影響に対し，主に対処行動をおこなっていたのは母親であった．母親は，医師の指示がなくても，家の掃除をこまめにおこなう，空気清浄機を購入する，シーツをこまめに洗濯するなどの環境整備をおこなっていた．また，アレルゲンと考えられる動物を飼っている場合には，実家に帰るなど環境をかえるという対処もおこなっていた．

子どもの皮膚のケアも母親が中心となっておこなっていた．皮膚のケアとしては，薬の塗布やシャワー浴による皮膚の清潔保持をおこなっていた．父親は，「母親に任せていた」と言うことが多かったものの，休日など時間のあるときには，母親の指示のもと，薬の塗布など手伝うこともあった．

父親が中心となっておこなっていたのは，情報収集であった．アトピー性皮膚炎のことを気にかけて，同僚から情報収集をしたり，本を購入したりしていた．そして，母親とともにそれらの情報を共有し，治療法を模索していた．

(3)今後の展望

本研究により，アトピー性皮膚炎であることによる家族への影響とその対処行動の概要については明らかになったものの，それらの構造とプロセスについては分かっておらず，また，理論的飽和にも至っていない．そのため，今後もデータ収集をおこない，分析を続ける必要がある．分析を続け，家族の対処行動を明確化することで，家族の対処能力に応じた個別的な介入を考えることが期待できる．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

６．研究組織
(1)研究代表者

三戸　由恵（MITO YOSHIE）
首都大学東京・人間健康科学研究科・助教
研究者番号：60404943